

千葉県酪農のさと 嶺岡牧講演会

2025 年 度 第 1 回

嶺岡牧を再興した徳川吉宗



発掘調査で検出された嶺岡西一牧と嶺岡西二牧を分ける仕切土手の木戸跡

【目次】

世界的先駆者だった徳川吉宗・・・・・・・・・・・・・・・・	日暮 晃一	1
吉宗は嶺岡牧再興で何をしたか・・・・・・・・・・・・・・・・	白石 典子	9
ミニ企画展 パネル展 探検！ 嶺岡西二牧・・・・・・・・		17

世界的先駆者だった徳川吉宗

日暮 晃一

わくわくドキドキ過ごして

I. 小石川薬園の拡充

実施した施策と発展段階から八代將軍徳川吉宗を評

価する。特に、嶺岡牧との関連にポイントを置き、嶺岡牧の復興、及び小石川御薬園の拡充に始まる医療改革に着目する（図1）。

東京大学大学院理学系研究科附属植物園 小石川植物園案内図



図1 小石川御薬園跡（小石川植物園）

URL : <https://koishikawa-bg.jp/ennai/>

江戸幕府は1638(寛永15)年に、江戸で薬を得るため、薬草を栽培する薬園を麻布と現文京区の大塚に設置した。大塚の薬園は廃止し、麻布の薬園は徳川綱吉が1684(貞享元)年に幼少期に過ごした館林藩下屋敷である白山御殿の敷地の一部に移した。小石川御薬園と呼ばれたこの薬園を、徳川吉宗が1721(享保6)年に御殿地全域に広げ、ほぼ現在の小石川植物園の形となった(図2)。

小石川御薬園は、台地斜面を中心に台地上から解析谷までを含み、比高12mである。木本類も多く栽培されていた。しかし、明治政府により多くの木が切られ、

現在残されている薬草園は、江戸期の面影を再現しているに過ぎない(図3)。

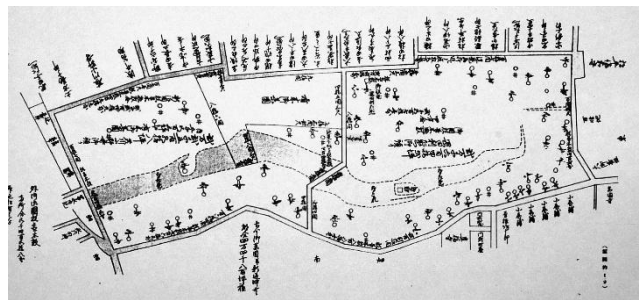


図2 小石川御薬園の形状

URL: <https://koishikawa-bg.jp/overview/>



⑧本館



うちだ よしお
内田祥三の設計により1939(昭和14)年に完成しました。研究室、事務室などのほか、図葉標本約70万点、植物学図書約2万冊があり、研究に活用されています。(本館は非公開)

⑨柴田記念館



D 理学部植物学教室教授であった柴田桂太の「生理化学研究室」として、1919(大正8)年に建てられた建物です。建物の左側には記念碑が立っています。館内では、植物や植物園にまつわる展示を行っているほか、植物画カードや絵葉書、冊子等を頒布しています。

【開館時間】
F 10:30-16:00

植物画カード42種類
1枚180円(税込)



⑪旧東京医学校本館(重要文化財) G (総合研究博物館小石川分館)



臨時休館中(2023年2月現在)
開館についての情報は総合研究博物館のHPをご確認ください。

④冷温室

開館 10:00-15:00
写真写真はコマクサ

⑤温室

【公開時間】10:00-15:00

⑥ニュートンのリンゴ

ニュートンの生家にあつた木の枝を接木したもの。

⑦メンデルのブドウ

メンデルが実験に用いた由緒あるブドウの分株。

F 跡の碑

所でサツマイモを
示す記念碑。

⑭メタセコイア林

三木茂が化石に基づき1941(昭和16)年に発表。後に中国で生きている株が発見された。

⑬ソメイヨシノ林

⑫精子発見のソテツ

池野成一郎が研究に用いた鹿児島市に現存する株の分株。

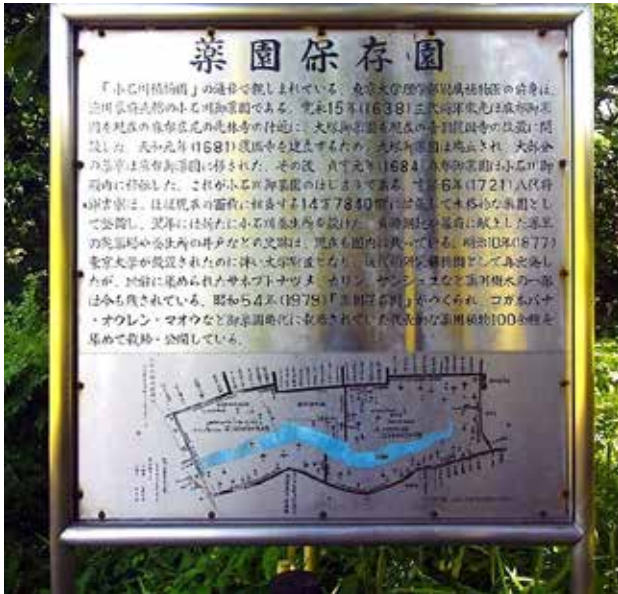


図3 小石川御薬園の様子を展示

方剤の中心になる君薬に加え、多くの臣薬、佐薬、使薬となる植物を、国内は無論のこと、東アジア諸国等からも導入し、朝鮮人参、甘藷、サトウキビなども栽培された（図4）。

薬園は、西北側半分を芥川小野寺元風、東南側半分を岡田利左衛門が管理し、それぞれの屋敷で、園内生産の薬草を乾燥し、調剤に用いた（図5）。



図4 甘藷試作地の碑



図5 薬草乾燥場の石畳

Ⅱ. 小石川養生所の設置

徳川吉宗は1723（享保7）年12月13日、小石川御薬

園内に江戸幕府立の小石川養生所を開所した（図6～図9）。この、無料で医療を受けることができる小石川養生所は、官製の貧民救済施設といえる。

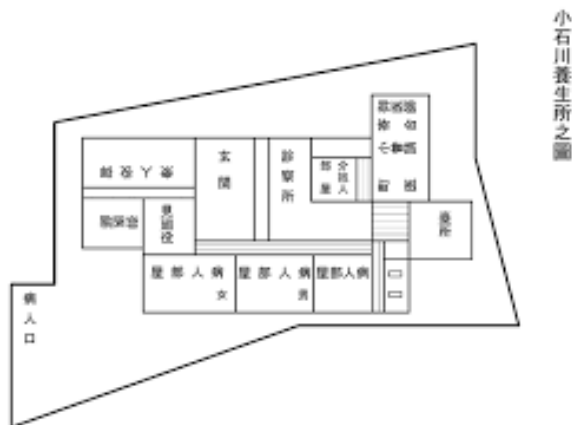


図5 小石川養生所の図

福濱嘉宏 小石川養生所の絵図面を中心とした建築的史料の検討と復元的考察 <https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400029555.pdf>

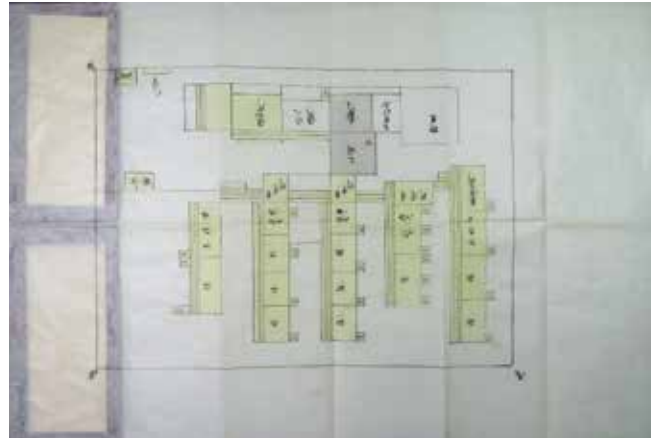


図6 小石川養生所の見取り図

東京都公文書館 <https://www.facebook.com/tokyo.archives/posts/>

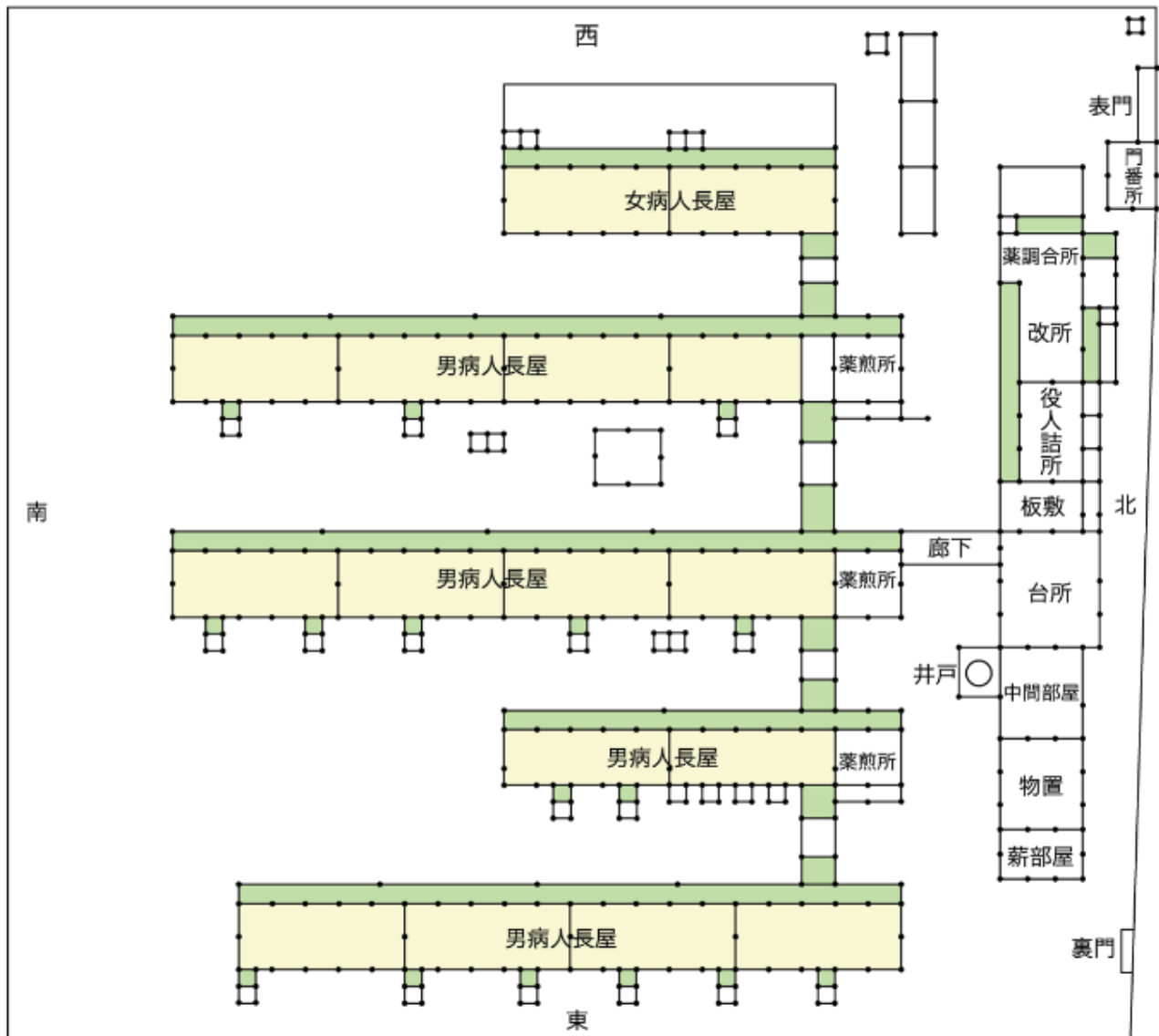


図7 図面化された小石川養生所の見取り図

小石川養生所の見取り図 <https://jnapcdc.com/LA/yun/01/>



図 8 小石川養生所のイメージ

旧養生所の井戸-赤ひげ先生と小石川養生所 <https://edokara.Tokyo/conts/2020/09/04/1583>



図 9 小石川植物園に残る小石川養生所の井戸

1. 官製の養生所設立計画

徳川吉宗は 1721（享保 6）年 7 月に、評定所腰掛前に目安箱を毎月 3 回置くことを示した。漢方医の町医者であった小川笙船は、享保 6 年 12 月に施薬院の設立嘆願書を目安箱に投函した。

徳川吉宗は、享保 7（1722）年 1 月に、小川笙船による施薬院設立の上書を取り上げ、御側御用取次の有馬兵庫頭氏倫に施薬院設立を命じた。有馬氏倫は、町奉行中山出雲守時春と大岡越前守忠相に小川笙船上書の考えを確認するよう命じ、ただちに大岡越前守宅に笙船を呼び寄せ中山出雲守同席のもと、施薬院設立に関する構想を聴取した。2 月に、有馬は笙船の構想には難しさもあるが、問題点は笙船と検討することとし、与力に事務方を担当することとした。翌日、施薬院設立の事務方として、中山出雲守組与力満田作左衛門、大岡越前守組与力吉田十郎兵衛を任命した。6 月に、施薬院役人には、与力が 2 人、同心が 10 人あれば施薬院の管理は可能と報告した。

同年 7 月、施薬院体制の骨格をまとめ、以下が報告された。

- 1) 施薬院の医師は、小普請医 1～2 人が毎日見廻る。夜の急病人は町医者・扶持人医者 1～2 人に、連絡があり次第施薬院に来ることを命じる。笙船には、昼間の見廻り・病人介抱・薬の吟味等を依頼する。
- 2) 町奉行与力 2 人は隔番で詰め、施薬院の一式の指図、病人の出入り改め、惣賄い入用品や薬用人参の吟味を行う。
- 3) 町奉行同心 10 人のうち 2 人は年寄り同心として賄い惣元締めや必要物品購入時の吟味役とし、他 8 人は、薬煎や病人の見廻り役を昼夜隔番で勤める。
- 4) 中間 8 人は、門番や病人の看病人にあたる。
- 5) 中間の女 2 人は、女性の病人看病や洗濯物の世話をする。
- 6) 施薬院の病人は、極貧で薬も貰えず、独身で看病人もいない者とする。
- 7) 病人に、夏は単衣の着物、冬は綿入れ 1 つ、鼻紙、貸夜具蒲団を渡す。
- 8) 病人を施薬院に送るには、寺社町方近在の筋々へ申し出て吟味の上送る。
- 9) 病人が回復した時は、医者衆・与力・笙船が立ち会い退院を決め、与力が派遣先に届ける。
- 10) 病人が外出し帰らない時は、与力が事情を病人の派遣先へ届出る。
- 11) 施薬院の総費用の見積りは、建物が金 210 両、物資の購入や人件費は約金 289 両。

2. 養生所の解説

7 月の計画をもとに準備が進められ、5 ヶ月後の 12 月 13 日に、小石川御薬園内に有床診療所の施薬院が開設された。まもなく、名称を小石川養生所に変えている。

東京都公文書館に天保期の養生所を示した絵図が残されている（図 6）。これを図面にした図 7 でみると、敷地の西側に表門があり、管理棟と病棟が土間を挟んで配されている。管理棟は、物置、中間部屋、台所、役人詰所、薬調合所、が並ぶ。中間部屋の後ろに今も残る井戸がある（図 9）。病棟部分は 4 棟の男病人長屋、1 棟の女病人長屋と、3 カ所の薬煎所からなっている。病床数は 40 床であった。

小石川養生所は町奉行が管轄し、小川笙船、小川丹治父子が肝煎を務めた。また、作左衛門と吉田十郎兵衛

衛が養生所の与力となり、医師は小川笙船、小川丹治、岡丈庵、林良適が本道（内科）を担当し、夜間の急病には木下同圓、八尾伴庵、堀長慶が行った。患者数が増え、病も多様となったことから、2009年には本道7人、外科4人、眼科1人に増員した。はじめは幕府医の寄合医師・小普請医師が治療していたが、1843（天保14）年から町医師が担当した。なお、養生所の勤務年数で幕府医師への取り立もあった。

開所したばかりの時は、養生所は薬草の効能試験が密かな目的との風評が立ち、無宿者並の扱いがされると嫌われ、利用者は少なかった。そこで、2ヶ月後の1723（享保8）年2月に入院基準を看病人があっても貧民なら収容できるとし、10月には行倒人及び寺社奉行支配地の貧民も収容できると緩和した。また、7月に町名主の養生所見学を行い風評払拭に務めたこともあり、入院患者は増加した。

Ⅲ. 醍醐の生産・普及

徳川吉宗は、薬草とともにすべての病に効く薬を探し、仏教の經典である大般涅槃經に記されている五味相生の譬に着目した。

斉梁時代に書かれた涅槃經聖行品（卷十四）には、五味相生の譬喩として、以下のように記されている。

譬えば牛より乳を出だし、乳より酪を出だし、酪より生酥を出だし、生酥より熟酥を出だし、熟酥より醍醐を出だして醍醐は最上なり。若し服することあれば衆病皆除き、所有の諸薬悉くその中に入るが如し。

これをそのまま受け取ると、醍醐こそが最上の薬餌だということになる。そこで吉宗は、すべての人々の寿命を伸ばすため醍醐を普及することとした。この醍

醐の普及で、吉宗の医療改革が完成した。醍醐は、亀甲形をしており、砂糖を少し加えて石鹸ぐらいの堅さになるまで煮詰めた乳製品で、生キャラメルに近い味のものであった（図10、図11）。

この醍醐は、1792（寛政4）年に江戸幕府版商標として白牛酪の名を与えられたが、幕末に嶺岡牧の八丁陣屋で行っていた白牛酪づくりを見ていた永井牧士家の子孫の聞き書きが金木編（1961）に記されている。醍醐を知る唯一のデータで、バターやチーズとは全く



図10 復元した醍醐



図11 醍醐の型の復元図

異なる。聞き書きには以下のように記されている。『その白牛の乳から白牛酪というものをつくったが、これは白牛の乳を鍋に入れて砂糖を混ぜ、火にかけて丹念に掻きまぜながら石鹸位の堅さになるまで煮詰めたもので亀甲形にしてあった。そして非常に貴重なものとして病人などはそれを削って、お茶で飲んでいたりしたといわれている。私も極く幼少の頃祖父につれられていってそれを甜めたこともあったが、今考えてみても非常にうまかった。この白牛酪を作るのは唐鍋の鍋に限っていたのも面白いことである』。千葉県酪農のさとでは、体験を通して醍醐（白牛酪）の周知化を図っている（図12、図13）。

醍醐をつくる上で欠かせない原料乳を確保するため、1727（享保12）年に繁殖牧場として白牛を嶺岡牧へ放し管理型放牧酪農を始めた。生業としての酪農でなく、産業としての酪農の初めてである。このことから、千葉県では嶺岡牧を県の文化財に指定している。なお、醍醐の原料として砂糖が必要だが、吉宗はサトウキビを琉球から小石川御薬園に移入し栽培を行っていたことから、嶺岡牧にサトウキビを導入し、サトウキビの栽培から砂糖づくりまでを行っていた。

醍醐づくりは、徳川家重が將軍職に就くまで江戸城



図13 醍醐（白牛酪）づくり体験のファシリテートツール
資料：嶺岡牧研究所・千葉県酪農のさと(2012)



図12 醍醐（白牛酪）づくり体験



図14 日本酪農発祥之地の石碑

内で行っていた。白牛は、美作から3頭導入している。吉宗が白牛を導入したときは鎖国体制が整備されてから半世紀経っている。白牛が海外から導入された場合、すべて長崎会所の記録に残る。だが、会所にそうした記録はなく、明治後の近代文書にいきなりインド産と現れることから、白い和牛であったと結論づけた（野村 1969）。横山（2023）は『徳川実記』、『白牛酪考』にそうした記載は無く、オランダ商館日誌にも白牛の記述はみつからなかったと述べている。インド産や東インド会社は、明治以降の俗信といえよう。

繁殖牧場である嶺岡牧で仔牛を産ませると、母子を江戸へ送り、消費地牧場である江戸の牧場で白牛母子を飼養し、搾乳を行い、醍醐をつくっている。白牛は、できるだけ牧内で自由に過ごさせたため、吉宗治世に白牛母子を江戸へ送るのは、せいぜい年 1~2 回であったと考えられる。小石川養生所の患者に醍醐を提供できたか否か、興味が尽きない。

IV. 暮らしを政治の核に据えた先駆者：徳川吉宗

徳川吉宗の統治様式をみると、以下のように整理することができる。

- 1) 徳川綱吉以降急速に進展した重商主義経済政策をより一層推し進め、江戸を都市として整備を図っている。
- 2) 都市である江戸への人口流入を前提としつつ、都市の発展を支える農村部を維持できるよう、総合的な統治政策を行っている。
- 3) 都市には多くの貧しい無産階級が存在することから、都市の安定的発展施策として医療・福祉の必要性に着目し、小石川御薬園の拡充、小石川養生所の設置、万病の特効薬と考えられていた醍醐の生産・普及を実施した。
- 4) 都市を維持するため、都市計画を行い、火災への防備、ゴミ置き場の設置と、防災対策の仕組み整備、及びゴミ・糞尿処理、即ち衛生管理の仕組みを整備した。衛生管理のシステムは、レーニン（1899）がロシア農業に商品経済が浸透し、近郊農業が形成される記述と極似た姿を認めることができる。それにより、千葉県各地など江戸の近郊地域における江戸町奉行の支配地域には、泥面子など江戸ゴミが分布する。
- 5) 徳川綱吉は、商業による幕府財政の確立を企図し、馬耕を中心とした原動力生産を行う農林業を中心とする牧で、江戸幕府直轄 3 牧の中で最も費用がかかっている嶺岡牧を、元禄の大地震による牧が大きな被害を受けたことを理由に閉鎖した。これに対して吉宗は、江戸幕府組織の再整備及び防衛の再編強化として嶺岡牧を再興した（図 15）。

以上、吉宗の時代を見据えた政策は、人々の暮らしづくりを核として進めている点に特徴がある。それは、SDGs の理念とそれを維持するための環境整備と一致する。その点で、吉宗は SDGs より 300 年早く暮らしづくりを進めた世界的先駆者といえる。



図 15 嶺岡牧の再興を建言した見分帳
千葉県公文書館所収

【文献】

- edo→tokyo 「旧養生所の井戸-赤ひげ先生と小石川養生所」
<https://edokara.tokyo/conts/2020/09/04/1583>
- 福濱嘉宏「小石川養生所の絵図面を中心とした建築的史料の検討と復元的考察」<https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400029555.pdf>
- 金木精一（1961）安房酪農百年史，安房郡畜産農業協同組合，p.18.
- レーニン（1899）ロシアにおける資本主義の発展
- 薪場竜「小石川植物園に行って教授に訊いてきた「薬剤師にしか通じない話」」<https://www.ph-10.com/yakupresso/articles/389/>
- 野村泰三（1969）日本乳製品小史，有隣堂出版，pp.52-60.
- 東京都公文書館 <https://www.facebook.com/tokyo.archives/posts/小石川養生所ができる-コロナ禍医療従事者の皆様の献身的な治療や看護のお陰でたくさんの命が救われています-江戸時代にも多くの人々の命を救うべく自ら立ち上がったお医>
 /345342941
- 日本医師会「創設 300 周年の小石川養生所跡を訪問」
<https://www.med.or.jp/nichiionline/article/010937.html>
- SDG/General Assembly (2019) *Accelerating the implementation of the 2030 Agenda for Sustainable Development*, United Nations.
- 東京大学大学院理学系研究科附属植物園「小石川植物園について」<https://koishikawa-bg.jp/overview/>
- 東京大学大学院理学系研究科附属植物園「小石川薬園」
<https://koishikawa-bg.jp/overview/oyakuen/>
- 山口静子「小石川養生所初期の医療活動について」日本医師学会，p.233. http://jshm.or.jp/journal/60-2/ippan/60-2_233.pdf
- 尹世遠「日本の近代病院建設 江戸の医療施設「小石川養生所」」
<https://jnapcdc.com/LA>
- 横山鈴子（2023）岩本正倫の歌と人—背景にあるもの—，「嶺岡紀行」を読んでみませんか！，千葉県酪農のさと嶺岡牧講演会 2023 年度第 1 回，千葉県酪農のさと／NPO 法人エコロジー・あーキスケーブ，pp.19-24.

吉宗は嶺岡牧再興で何をしたか

白石 典子

嶺岡牧スチュワード

I. はじめに

嶺岡牧は慶長 19 (1614) 年に江戸幕府直轄の牧場とされ、その後元禄地震による被災を経て一時中断するが、八代将軍吉宗のもとで再興され、暮らしに必要な原動力たる馬の生産を担う牧場機能を果たした。

「日本酪農発祥の地」ともされる嶺岡牧は、吉宗による白牛飼養の始まりでもあり、2026 年はそれからちょうど 300 年の節目となる。しかし、嶺岡牧の知名度は依然として高くはなく、このような情報に触れることができる人も限られている。

現在までの研究においては、17 世紀の嶺岡牧の姿について、石井家文書から迫った大谷(2009)や金澤(2017)による考察があるが、元禄期の中断を経て再興された嶺岡牧の整備の実態は十分には検討されていない。

それは嶺岡牧に関する一次史料へのアクセスの難しさや、専門研究者の少なさが一因であるとされ、「嶺岡牧にはまだ眠っている歴史が多く、史料へのアクセスしやすい環境整備と継続的な研究が求められる」(金澤 2017) と指摘されている。

本稿ではこうした課題を踏まえ、旧牧士家である石井家文書の「享保年中嶺岡牧場御取立之節方書留帳并野馬矢馬書附」を中心として、その他の地元に残る古文書、嶺岡山中の遺構などを手がかりに、享保年間における嶺岡牧再興の具体的実態に迫ることを目的とする。

II. 享保の嶺岡牧再興

1. 牧の範囲の把握

享保 10(1725)年に牧野境の確認を行い「榜示杭」を 100 間に 1 本の間隔で建てた。(牧場の範囲を明確にした)

牧	間数	道法	メートル
嶺岡西ノ牧	12855 間	5 里 34 丁 15 間	約 23.4 km
嶺岡東ノ牧	18148 間	8 里 14 丁 28 間	約 33 km
柱木牧	6091 間	2 里 29 丁 31 間	約 11.1 km

図 1 享保年中の野廻

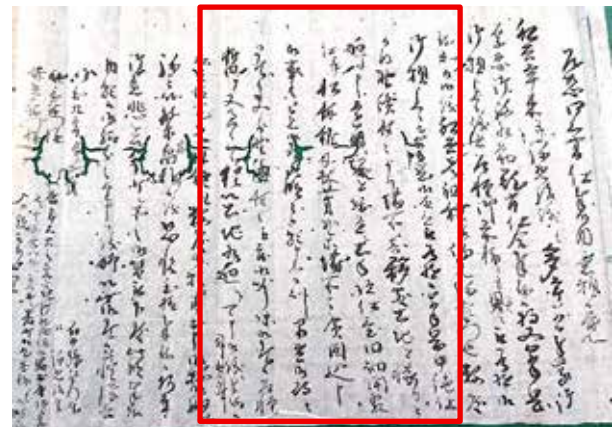
2. 検地と年貢

新開の田畑、見取場とされた耕作地の検地を行い、享保 8(1723)年から「惣田畑 35 町 1 反 7 畝 1 歩」と決定した(図 2)。

また、これ以後、牧内での一切の開墾を禁じた。史料 1 は牧の再興以前も以後も百姓による開墾が止まらず、牧士が幕府に嘆願している書状。

	田畑合	田方	畑方
① 本年貢 + 享保元～7 年に 開発分	11 町 3 反 19 歩	5 町 7 反 1 畝歩	5 町 5 反 9 畝 19 歩
② 正保 4(1647)～ 享保元(1716)に開 発分	19 町 9 反 6 畝 12 歩	5 町 4 反 6 畝 12 歩	14 町 4 反 8 畝歩
①+②享保 8(1723) ～徴収する年貢	35 町 1 反 7 畝 1 歩		
松竹萱林 (林銭)	3 町 9 畝 4 歩	※林銭は免除	

図 2 嶺岡牧再興に際行った新開見取場検地反別



史料 1 乍恐口上書仕奉御内意頼候覚-石井家文書

（赤色囲部分を翻刻）

御願申上候而峯岡御取立被為遊候峯岡中絶仕
候内野統村々より場所ニ寄移敷土地を猥リニ
迫り申懸圀ニ堀を堀通し土手垣仕置田畑開発
仕并松林雑木林茅野等場所く廣圀込申
御事共ニ者御座□段々御願申上候則早遣御尋
御座候夫方野統村々江茂御吟味御座候免輕
漸ク過候ハク猶以土地相迫り可申御儀ニ奉存候

史料2 乍恐口上書仕奉御内意頼候覚-石井家文書

3. 牧士と捕手の任命と給金

嶺岡牧再興時の牧士任命は享保 7(1722)年幕府馬預の諏訪部文衛門と野馬奉行、綿貫夏右衛門が嶺岡に派遣されて行われた。その後享保 11(1726)年に嶺岡牧場と牧士は代官所の支配下となり、野馬だけは今まで通り諏訪部文衛門の支配下に分かれた。

享保 16(1731)年牧士給金は三両二人扶持と決められ、給金は斎藤三右衛門から渡し、扶持米は代官の管理で、村方から年貢として納める分から牧士に支給された。

また、捕手は6名が任命され、給金1両2分が斎藤三右衛門から支給された。

村	牧士名	任命年
平郡山田村	川名与右衛門	享保 7
平郡平久里中村	加藤幸右衛門	享保 7
平郡荒川村	高梨(利右衛門)半兵衛	享保 7
平郡吉井村	池田久兵衛	享保 7
長狭郡坂東村	石井孫左衛門	享保 7
長狭郡東野尻村	瀧原(半助)武左衛門	享保 7
朝夷郡川谷村	佐久間平蔵	享保 11
朝夷郡石堂原村	日野善右衛門	享保 11

図3 嶺岡牧柱木牧再興時の牧士

※高梨家は利右衛門、滝原家は半助が再興時の牧士代替わり後の名前になっている。

村	捕手名
平郡山田村	善兵衛
平郡吉井村	直右衛門
平郡平久里中村	角助
平郡荒川村	定助
長狭郡坂東村	清右衛門
長狭郡東野尻村	長三郎

図4 捕手

（捕馬の際、馬捕場に入った野馬に縄をかけて捕獲する者）

4. 代官見廻り手代について

就任期間	見廻り手代名
享保 7 寅年迄 3 年	栗田所助
享保 10 巳年～未年迄 3 年	井上嘉助
享保 13 申年～亥年迄 4 年	加嶋源六
享保 17 子年～5 年	鈴木庄内

図5 代官見廻り手代

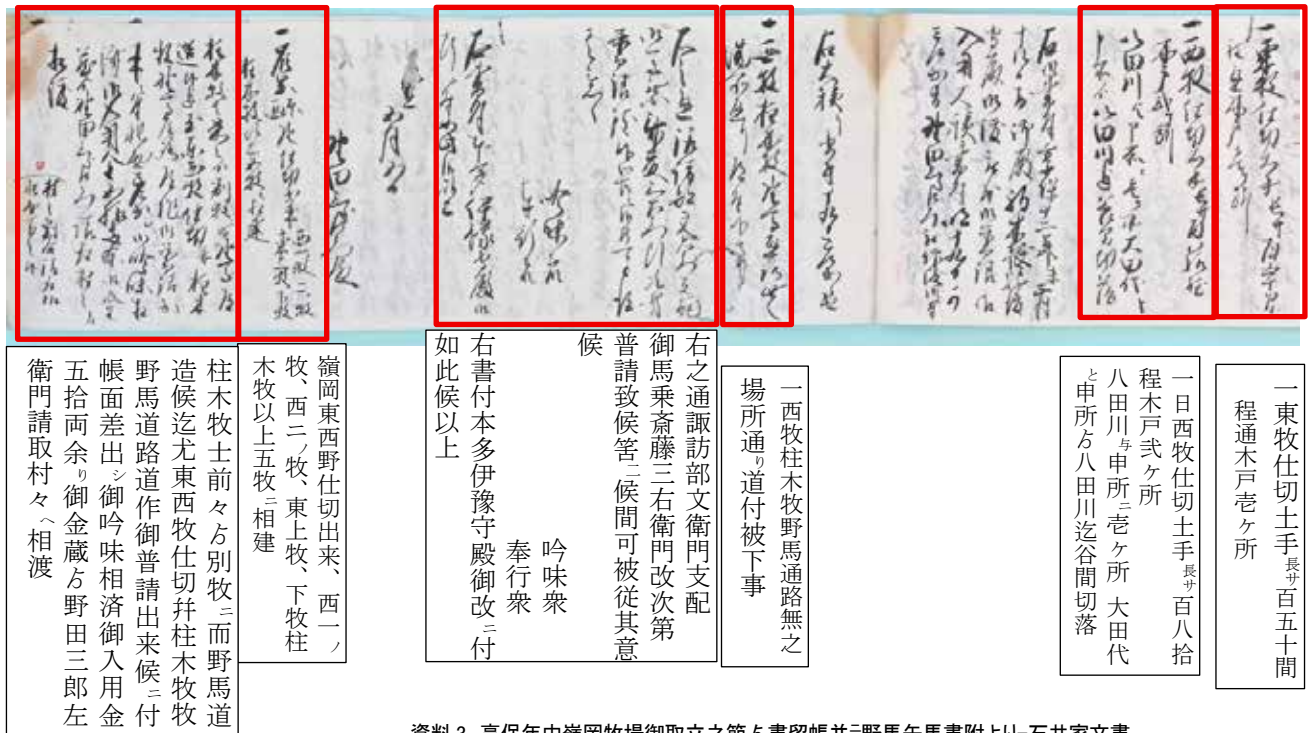
見回り手代の職務は毎月嶺岡に来て、牧士の勤務を監視、代官所からの廻状の作成、村方にある鉄炮の管理、狼山犬の駆除、野馬土手の修繕、馬の吞井浚い、等作業指示。馬捕の段取りなど多岐にわたっている。

また、代官の配下ではあるが、幕府馬乗で野馬の管理を任されている斎藤三右衛門と連携をしながらその指図に従う立場ということがわかった。三衛門が嶺岡に逗留の際は八丁陣屋の最寄の村に泊まり。三右衛門の用事があれば承り、馬捕りの時には近隣の百姓の家へでも泊り込み、馬捕りの行事が第一の仕事として不備のないように務めるとの記載もある。

更に、日頃の職務の中で、10 月末以降、冬枯れの時期は野馬が土手の外へ里出しやすいので野馬土手の管理を入念にすること、正月 11 日を過ぎたら、早々に嶺岡馬捕場の土手や木戸の修復を行い、正月末から二月初頭の馬捕りに間に合うようにすること。など細かい指示が行われているのは興味深い。

牧の現場では、見廻り手代が、代官所・村方・牧士・そして幕府の馬乗斎藤三右衛門との間で折衝・調整を行う役割を担っていた。各組織が見廻り手代の存在を介して影響を及ぼし合いながら牧の運営に関与していた構図が浮かびあがる。

5. 嶺岡牧内の整備



資料3 享保年中嶺岡牧場御取立之節方書留帳并野馬矢馬書附より石井家文書

資料3からは、享保12(1726)年の嶺岡牧の整備に関して若年寄本多伊豫守、勘定奉行駒木根肥後守、代官野田三郎左衛門、幕府馬乗斎藤三右衛門、勘定吟味役、勘定奉行衆、が確認できる。享保期に幕府事業をどの様に行ったか、プロセスが確認できる資料といえる。村方は完成の後に、作業に関する帳面を提出し、55両を御金蔵から代官野田三郎左衛門に支払われ、村割合に応じて各村に支払われた。

東牧の仕切土手普請は「瀧原文書」(図5)の中にも記載されている。「東野仕切土手百五拾間高サ八尺敷式間馬踏壱間」と、土手の規模が窺われる。また、普請に際して高割100石に付き13人が課せられ、どこの村が何人の人足を出したのか記録されている。

東野仕切土手百五拾間高サ八尺敷式間馬踏壱間此土手坪○此普請人足此割高百石三拾三人掛内拾三人明日御出可被成候
一四十人上野村八人 一廿三人中居村八人 一十四人宮村五人 一三十人代ノ村十人 一四十六人内 十六人…
右人足明十一日明六時御馬取場所迄差出し可被成候尤
栗田所介様(代官見廻り手代被仰付候間如此申上候跡方所介様御廻状相廻候…

史料4 享保年中方折々之旧縁集帳瀧原文書



図6 現在も残る仕切土手 上:東牧 下:西牧

【文献】

Ⅲ. 結び

本稿は、吉宗による嶺岡牧再興の具体的な施策について、旧牧士家文書の享保年間の記録をもとに検討した。

再興に際して牧の範囲を明確にし、見取場の検地を行い年貢を見直す。牧を五牧に分けて管理する為に仕切土手を築き、柱木牧から野馬を移動する通路を整備する。若年寄から勘定奉行所、代官所、幕府馬預が複層的に関係をしながら事業を進める様子を確認した。また、嶺岡牧の職掌としては牧士の他に捕手、代官見廻り手代を確認し、特に見廻り手代が現場における調整機能を果たした役割について解明した。

再興以降の嶺岡牧は、白牛放牧、寛政期の近代酪農と白牛酪産業を支える原料生産牧として重要な役割を果たす。(白石 2019)その原点にあるのが将軍吉宗の再興であった。

冒頭に掲げた課題を進める為に 2022 年に発足した嶺岡牧スチュワード協会では、地域に残る古文書のデータベース化・公開に向けた取り組みを行っている。こうした取り組みが、今後の嶺岡牧研究の発展に寄与することを願ってやまない。

大谷貞夫(2009)安房国峯岡牧の再興をめぐる、江戸幕府の直営牧, 岩田書院, p p.127-143.

金澤正嗣(2017) 古文書からみた 17 世紀の嶺岡牧, シンポジウム嶺岡牧の姿に迫る要旨 p.13.

白石典子(2019)瀧原家文書に記された酪農・白牛酪産業の振興策, 千葉県酪農のさと嶺岡牧講演会 2019 年度第 3 回嶺岡牧研究の最前線嶺岡牧新発見&新たな課題要旨 pp.1-8.

享保年中嶺岡牧場御取立之節方書留帳并^ニ野馬矢馬書附
(翻刻) 石井家文書

享保年中 石井控
嶺岡牧場御取立之節方書留帳
并^ニ野馬矢馬書附

覚

先年花立枳形より川代

中野之内鎌留^セ年被

仰付候右者春志^{シヤ}や御馬御放

處^ニ有^ニ之候

寛政七年^卯 六月

太尾野来秀貝渚磯村

宮ノ下二子中居嶺通り計り

鎌留被 仰付候事

一房州嶺岡山之儀里見家

与里牧場^ニ年号不知其後

茂野馬立来候処多成里出致

作物等荒^シ候故村方^ニ相願度々

御捕駒被 仰付下候所拂^ニ相成候由

享保二十年迄八十四年^ニ成^ル

一承応元年^辰年鈴木孫左衛門殿

被遣候御捕駒被 仰付候由其節

之御代官不知

右同断八拾^セ年^ニ成^ル

一明暦元年^未年同人被遣候駒捕

被仰付候由御代官不知

右同断七拾年^ニ成^ル

一寛文六年^午年木村孫八殿被

遣候駒捕被仰付候由御代官

不知

右同断五拾^セ年^ニ成^ル

一貞享元年^子年御代官万年

長十郎殿迫山六左衛門殿御代官

所之節綿貫宗右衛門殿加藤

権左衛門殿被遣候御捕駒被仰付候^{よし}

右同断三拾九年^ニ成^ル

一元禄十^丑年池田新兵衛

御代所之節綿貫宗右衛門殿

中山勘兵衛殿被遣候御捕駒被

仰付候由 享保四年^亥四月

右嶺岡山牧場之儀房州長狭郡

坂東村石井孫左衛門親野馬之謂^レ

段々御注進申上候^ニ付享保六^丑年

野田三郎左衛門殿御代官所之節綿

貫夏右衛門被差遣見分被仰付候翌

寅年御馬乗り斎藤三右衛門御厩方

久保田武兵衛被遣候山田荒川中

村吉井四^ケ村坂東村石井孫左衛門

牧士□□牧場御取立之積り

相極有来野馬之内六拾^セ式三疋

残置三拾疋余残置相殘分者御

拂^ニ成其上母御馬御買上并南部

馬等御放御取立有之候

一柱木山之儀も峯岡同前是又

享保八^卯年御取立父馬母馬

共御牧ニ牧士式人享保十一年午

五月被仰付候

佐久間平蔵
日野善左衛門

一享保十巳年牧場境可相改旨

岩本内膳正殿方被仰渡寛

播磨守殿御掛^ニ御厩方斎藤

三右衛門青木幾右衛門被仰遣候

立会^ニ野田三郎左衛門改野境

相究百間^ニ老本^ツ、榜示杭

相建并嶺岡附見取場田畑
檢地有之候由

西ノ廻リ 間數壹万式千八百五十五間
嶺岡牧 但シ道法五里三十四丁十五間

東ノ廻リ 間數壹万八千四百四十八間
但シ道法八里十四丁二十八間

柱木牧野廻リ 間數六千九拾壹間
但シ此道法一里貳拾九丁三拾壹間

一田畑合拾壹町三反拾九步
當卯年改出シ

田方五町七反壹畝步

内

畑方五町五反九畝拾四步

是ハ御料私領共見取年貢も不相調ベ分但シ改出候ハ當卯年ニ而御座候改發仕候八年已前方去ル寅年まで段々切開仕候尤久保田武兵衛方ヘ證文差出シ候已前之儀ニ御座候

一田畑合拾九町九反六畝十二步

内

田方五町四反六畝十二步

畑方十四町四反八畝二步

是は十年已前正保四^亥年方六七年已前方段々切添仕御代官地頭方見取年貢調来候分

一松竹萱林有三町九畝四步
是ハ何十年已前方仕立候分与申儀も

相知レ不申年久敷躰ニ相見ヘ申候川除等修復之節伐遣候由
右六ヶ所御料ハ山役米永納来私領ハ山役米永小物成納ニ而地頭江山年貢納来分

惣田畑三十五町壹反七畝壹步

右者房州嶺岡山附村々御料私領共牧場之内江新開切添候分相改當卯年方御年貢申付候様ニ被仰渡候様ニ付手代差遣委細懸吟味候処書面之通御座候御料私領共當卯年改出候分ハ當卯年方其地相応之御年貢申付地頭年貢納来候見取年場之儀ハ只今迄之通佐倉小金之様を以被仰付自今牧場之内切添一切不仕候様可被仰付候哉奉伺候且又竹木萱林之儀ハ林残申付候様可被仰渡□□只今迄御料私領共山役米永納来其上竹木萱林ノ儀ハ猥リニ伐取不申萱林之儀困取払候様當春中久保田武兵衛申付百姓勝手にも不罷成候間林錢被仰付候儀御免被成有来□山役米永相納候様被仰付可然奉存候如何可被仰付下哉奉伺候以上

享保八年卯十月野田三郎左衛門
御勘定所

御附紙 書面之房州嶺岡牧附村々牧場之内御料私領新開播磨守印

切添候分被□吟味申卯年改出候分ハ御年貢申付地頭江年貢納来候見取場之分ハ佐倉小金之極ヲ以

肥後守印

申付自今牧場之内一切添一切不致候様ニ可申付哉之旨

弥太郎印

其方江御廻吟味下条伺之通可致候且又竹木萱林

弥三郎

之儀ハ向後林掛申付候様ニ及差図候處唯今迄

嘉兵衛印

山役米永納来其上去春中久保田武兵衛罷越

新六郎印

猥リ不伐採様百性共江申渡候故此上林錢申付る者吟味押切

百性勝手ニ不罷から間林錢之
儀ハ差免可然様是又何之通
差免有来通山役米永相納
候様ニ可被申付下断者本文
ニ有之候以上

辰二月

峯岡山牧士前々方牧士

御料平郡山田村

川名与右衛門

御料平郡平久里中村

加藤幸右衛門

御料平郡荒川村

高梨半兵衛

酒井大藏知行所

平郡吉井村

池田久兵衛

前田帯刀知行所

長狹郡坂東村

石井孫左衛門

酒井日向知行所

長狹郡東野尻村

瀧原武左衛門

大久保弥十郎知行所

朝夷郡川谷村

佐久間平藏

酒井日向守知行所

朝夷郡石堂原村

日野善右衛門

右同断

右牧士八人之内与右衛門幸右衛門
半兵衛孫左衛門武左衛門久兵衛儀六人
ハ嶺岡牧場御取立之節平藏
善右衛門兩人ハ去馬年方柱木
牧場与相分候得者惣而牧場御用
向者一統相勤申候但去ル亥年
方壹人ニ付御扶持方式人扶持
御給金三両ヾ被下候扶持方
者御繩成之内を以相渡候御給
金者齋藤三右候衛門方相渡候由
御座候
一右牧士之内平郡荒川村半
兵衛義ハ里見家心之牧士
子孫之由且又長サ郡坂東村
二里見家之厩跡地今以
除地ニ有之候

西牧捕手

平郡山田村

善兵衛

同郡吉井村

直右衛門

同郡平久里中村

角助

同郡荒川村

定助

長サ郡坂東村

清左衛門

長狹郡東野尻村

長三郎

右捕手之者六人年々御給金
壹両貳分ヾ被下候是又齋藤
三右衛門方相渡申候

覚

諏訪部文衛門

綿貫夏右衛門

右兩人方方房州嶺岡山ニ

罷在候牧士江御用之儀申

越候節滞無之様可被心得旨

右牧士共江可被申付候大久保

佐渡守殿御改ニ付如斯尔候

以上

寅三月廿七日

辻六郎左衛門印

杵弥太郎 印

御厩押切

荻原源左衛門印

無印形

寛播磨守 印

大下野守 印

駒肥後守 印

水伯耆守 印

池田新兵衛殿

享保十巳年野田三郎左衛門御代
官所之節兩牧場江野火并

往来之處火繩持入候事御
停止之高札相建

覚

牧士之内江野火附候事禁則
候并往来之處是方内江
猥ニ火繩持入へからづ候

右之趣堅く可相守處也

享保十巳六月

右高札嶺岡野附式拾四ヶ村
柱木野附六ヶ村ニ拾ヶ村江相
渡被建置候但高札損し候節ハ
村々方建候積リ

一房州嶺岡牧場并牧士之
儀御代官支配ニ被仰付野馬
之儀者只今迄之通諏訪
部文衛門取計候段享保十
一年十一月十三日猶 御殿本多
伊豫守殿御差図之由ニ而
駒木根肥後守殿方野田
三郎左衛門江被 仰渡候書付左
之通

野田三郎左衛門

嶺岡牧場并牧士其方支配ニ

可致候牧士之勤方且又

右牧場ニ而狼山犬打候鉄

砲之義ハ相改候様ニ可仕候野

馬之義ハ只今迄之通諏訪

部文衛門取計候様可被從

其意ニ右之通可被申渡候以上

午十一月

右御書付本多伊豫守殿方

御勘定奉行衆江相渡り写

駒木根肥後守殿方御渡被成候

但シ牧士并牧場六拾六ヶ村

野田三郎左衛門廻状ヲ以右之趣
相触候

御廻状扣有之候

一東仕切土手長サ百五十間
程通木戸壱ヶ所

一西牧仕切土手長サ百八十程
木戸貳ヶ所

八田川と申所ニ壱ヶ所大田代と
申所方八田川迄谷間切落

右御書付享保十二年未正月
十八日於 御殿駒木根肥後
守殿御渡被成御普請御
入用大積書付明十九日可
差出旨野田三郎左衛門被仰渡候ニ付

右積り書付十九日差出候也

一西牧柱木牧野馬道路無之
場所通リ道付下事

右之通諏訪部文衛門支配

御馬乗斎藤三右衛門改次第

普請致候筈ニ候間可被從
其意候

吟味衆

奉行衆

右書付本多伊豫守殿御
改ニ付如此候以上

□□

五月五日

野田三郎左衛門殿

東 西一ノ牧ニノ牧

一嶺岡 野仕切土手

西 東上牧 下牧

柱木牧以上五牧ニ相建

柱木牧士前々方別牧ニ而野馬道

造候迄尤東西牧仕切并柱木牧

牧野馬道路道作御普請出

来候ニ付帳面差出シ御吟味相

濟御入用金五拾兩余御金

藏方野田三郎左衛門請取村々ハ

相渡

村々割合請取候

帳面有之候

享保七寅年迄三ヶ年相勤_ル

見廻り手代

栗田 所助

享保十巳年_ヲ末年迄三ヶ年相勤_ル

右同断

井上 嘉助

享保十三申年_ヲ亥年迄四ヶ年
相勤_ル

右同断
加嶋 源六

享保十七子年_ヲ相勤

右同断

鈴木 庄内

右見廻り手代毎月牧場へ罷越
牧士勤方之様子野付野続
村々獵師百性四季打鉄炮
御免之者共并御鉄炮預候者共
狼山犬無油断防候様二申渡候
尤狼山犬打候負数牧士書
出_シ候得者猶又様子相尋吟味
之上書付致持参御掛_リ之御改
中_ニ御届申上候得者品々寄
右打留候處御褒美被下候義二
御座候

一見廻り手代出立之節御掛_之
御改中_ニ御届申上夫_ヲ斎藤
三右衛門方へ罷越委細従差_口
罷越候罷帰_リ候節も右同断
御改申上候三右衛門方へも罷越候
候事

一見廻り之度々野馬囲土手其外

野馬之_口罷_口候訴之見計繕等

申付候勿論馬吞井_等堀_リ候所々

も有之候得者浚等申付候_{口口}外

御入用掛_リ候御普請者勿論品_口

寄輕_キ繕御普請等二而も三右衛門

差図之通り立合之上積_リ取

御勘定所相伺_イ候事

一月々見廻り候度々四季打

鉄炮無油断為打可申旨

村々へ廻状出候

一月々見廻り候度々土手繕候

様二是又廻状出候

但し十月末_ヲへ猶又見廻り土手

垣丈夫_ニ申付候是へ春御

捕駒前土手垣冬枯_ニ成

候得者野馬外牧_江打

越或へ里出致_シ候付念

入申付候事尤境杭先

年_口相建有之候得者元

切付土手式三間内_江立有

之候_ニ付有来土手垣囲入

不申様見廻能々致吟

味御厩方_ヲ察當無之

様仕候

一見廻り之節泊休之儀并人馬

等之義前々_ヲ野附野続六十

六ヶ村江勝手次第

一斎藤三右衛門定宿八丁喜三郎

方逗留有之候節見回り手代

之義も八丁最寄村々泊_リ申付

御用向承之候御捕駒之節_者

一村之内百性成共可宿

仕候御捕駒御焼印御用之儀

第一之御用向_ニ付別而諸事

手支無之様仕候

一正月十一日過候得者早々嶺岡_江

見回_リに罷越込場土手垣木

戸等之修復入念申付候正

月末二月初頭御捕駒有

之候_ニ付如此

一來春御捕駒何拾疋与有之内

上牧之牧士へ承合御捕駒

員数_ニ式三疋も余計有之

候様二牽繩小口縄野続村々

方順番替々村々へ申付代錢

ハ常故

公儀_ヲ被下斎藤三右衛門被相渡候

御捕駒之義嶺岡牧東西柱牧

共二三日御捕駒有之候人足之

儀へ前広_ニ斎藤三右衛門_江承合

差図次第村方へ人足割合

申触御捕駒日限極次第右

人足召連罷出才料之者_江

申渡段々手_{口口}致_口御馬

牽人足等之義是又何拾疋

承合斎藤三右衛門差図之通

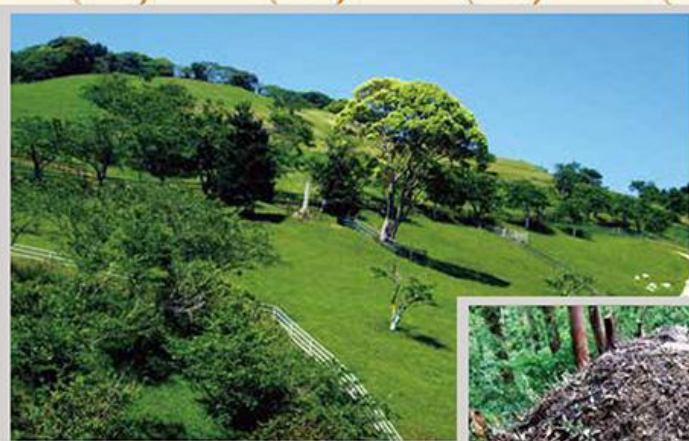
込場差出候事



2025 年度第 1 回嶺岡牧ミニ企画展

パネル展 探検！ 嶺岡西二牧

八代将軍 徳川吉宗は、最高の薬餌として知られていた醍醐の原料乳を確保するため、嶺岡西二牧で酪農を始めた。ここに見られた牧跡を、パネルで展示する。



現地案内・展示説明

第 1 回 牧士触頭の跡
5 月 18 日 (日)
13:30 ~ 16:00
申込み 5 月 11 日 (日)
千葉県酪農のさとへ

第 2 回 元名仮囲跡
6 月 29 日 (日)
13:30 ~ 16:00
申込み 6 月 22 日 (日)
千葉県酪農のさとへ
参加費 (資料代)
各回 200 円



千葉県酪農のさと酪農資料館第 3 展示室
2025 年 5 月 13 日 (火) ~ 10 月 12 日 (日)
開館 9:30 ~ 16:30 月曜休館 入館無料

千葉県酪農のさと

〒299-2507 千葉県南房総市大井 686 TEL 0470-46-8181 e_mail info@e-makiba.jp

探検！ 嶺岡西二牧

八代將軍徳川吉宗が、万病に効く特効薬といわれていた乳製品「醍醐」を普及し医療改革を完成させるため、嶺岡西二牧で酪農を始めた。嶺岡西二牧の遺構から、その姿に接近する。



牧士船頭の吉野五郎兵衛家跡と嶺岡牧



牧士船頭 吉野五郎兵衛家の墓地



上面と奥面

牧士船頭の吉野五郎兵衛が建てた馬の彫像



牧士船頭の吉野五郎兵衛が建てた馬頭観音



関東一人きり愛宕神社の石宮



愛宕神社脇に築かれた野馬土手と集落から牧に入る木戸



野馬土手周辺の石切丁場

集落から牧へ入る木戸

礎で区画をつくる

採石坑奥に建物跡

採石坑と木造石塚 野馬土手

矢穴のあいた母岩と残石

馬之背北麓の遺構群







千葉県酪農のさと嶺岡牧講演会 2025 年度第 1 回 要旨

嶺岡牧を再興した徳川吉宗

ミニ企画展 パネル展 探検！ 嶺岡西二牧

2025 年 7 月 21 日発行

編集・制作 NPO 法人エコロジー・アーキスケープ

発行 千葉県酪農のさと

